



学生数/869人 教員数/64人(専任) 職員数/84人
 学部/国際教養
 大学院/グローバル・コミュニケーション実践研究科
 THE世界大学ランキング日本版2017/総合20位、教員満足度1位

IRカルテ

【IR組織と所属】組織は設置せず
 【担当】IR担当官(職員1人。事務局長室に所属)
 【主な業務】各部署が管轄しているデータの整理、統合、分析

IRの目的	▶ 大学が進めている戦略について、データを活用して示唆を与える
データの収集・共有	▶ 事務局長の管轄の下、必要に応じて各部署で保有しているデータを収集
執行部や学部への報告と活用のされ方	▶ 学長や事務局長が、その時々々の戦略に応じて、何について分析してほしいのか大まかな指示を出す。IR担当官は自由に分析を行い、大学経営会議をはじめ、入試委員会、教育研究会議など各種会議体で報告
成果例	▶ 入試タイプと入学後のパフォーマンスの関係、タイプ別に適した授業履修モデルなどを分析し、カリキュラム改革に貢献

注目!

外部アセスメント「CLA+」で教育効果を測定 学生、大学それぞれが結果を基にアクション

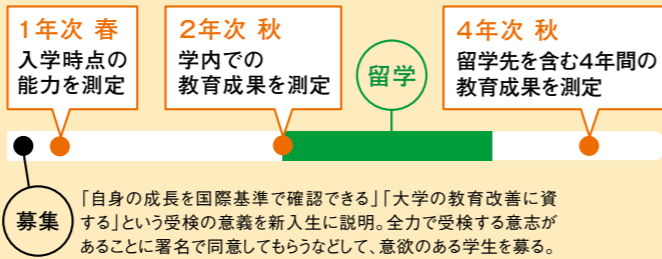
批判的思考力などを客観的に測定

「CLA+」(Collegiate Learning Assessment)は、批判的思考力、分析思考力、文章表現力、問題解決力など、大学で学んだ成果全般を測定するアセスメントだ。開発・実施団体はアメリカのCAE(Council for Aid to Education)。1年次と4年次に受検させ、大学の教育効果を測定し、大学間で比較を行う使い方が想定されている。大学には個々の学生のスコアが提供されるため、詳細な分析が可能だ。

自学と留学先、それぞれでの成長を知る

4年間の学修成果の可視化のために、入学時から継続して受検してくれる学生を募集。2年次にも受検機会を設け、成長の要因をよりわかりやすくする。学生にとっては自身の長所、短所を把握することにより、その後何に取り組むべきかのヒントを得られるほか、海外の大学院に進学したり、企業に就職したりするときに、自身の成長を保証するものとして示せる。

4年間で3回の受検機会



CAEから大学、学生それぞれにメールで送られてくるスコアシート



スコアシートの見方について、日本語で補足を加えた解説を配布

学修成果の可視化

汎用的能力の測定 学修成果を国際ベンチマーキング

国際教養大学

国際教養大学は、特長であるリベラルアーツ教育を世界レベルにしようとして、国際的な指標を導入した。

リベラルアーツの成果を測れる指標を求めて

本学は2014年度にスーパーグローバル大学創成支援事業の採択を受け、世界レベルのリベラルアーツ教育をめざす「日本発ワールドクラスリベラルアーツカリキュラム構想」に向けた取り組みを推進しています。事業の4本柱の1つが、国際ベンチマーキングです。海外の大学と比較する理由は大きく2つ。1つは、学部教育が非常に濃密でレベルが高いアメリカのリベラルアーツカリキュラムとの比較が、ワールドクラスに近づくためには必要だからです。もう1つは、教育の質保証です。本学は47か国・地域187大学と協定を結んでおり、4年間のうち主に3年次は、それらの大学との交換留学にあてられます。本学の学生の成

績は2大学分の成績が入り交じるわけで、本学の教育を世界標準にしなければ質保証ができないと考えました。

提携しているアメリカのリベラルアーツカリキュラム*3大学をベンチマーク対象として、カリキュラム改革の方向性、教育方法、学生支援、教員人事などの情報交換を始めています。ベンチマーキングの主要な指標として、「CLA+」(P.27下コラム参照)のスコアを活用します。

リベラルアーツの特徴の一つは、教員と学生が共に授業をつくり上げていく「双方向の学び」。こうした学びで育成する批判的思考力や主体性などの汎用的能力を客観的に測れ、世界標準として通用する指標を探しているときに、CLA+に出会いました。

1、2、4年次の成績を比較し

て4年間の学修成果を数値化し、アメリカの大学と比較しながら絶えず教学改革を進めることで、教育の質を引き上げていきます。

組織や専門職でなくても機能するIRのあり方

本学では、IRは特別なものではなく、大学の各部署に自然と溶け込んでいるものでなければならぬと考えています。小規模大学で、全教職員がIRに携わるためにも、独立した組織に任せるのではなく、フレキシブルな立場の担当官が各部署を回り、全員で協力し合って活動していく形が、本学には合っています。

そのためIR組織はつくらず、IR担当官1人のみを置いていきます。生え抜きの職員で、統計の専門家ではありません。基礎的な統

計手法ですが、指標の組み合わせ方がうまく、深い分析をしてもらっています。教務や国際センターなど複数の部署を経験して、学内事情に通じている職員だからなのでしよう。教職員が日頃思っている問題意識をデータで明示するので、教育を前進させようと、データ提供等に教職員は進んで協力しています。

今後は、CLA+のスコアについても当然IRの分析対象に入れていきます。文部科学省が提唱した学士力にうたわれているように、思考力や主体性などは、今やリベラルアーツに限らず、全ての学士課程において育成すべきものとなっています。学部教育の質を保証するにあたっては、そうした汎用的能力を測定できる客観的な指標を、どの大学も進んで持つべきではないでしょうか。



学長 鈴木典比古

すずきのりひこ ●1978年インディアナ大学経営大学院博士課程修了。国際基督教大学学長、大学基準協会専務理事を経て、2013年から現職。中央教育審議会大学分科会大学教育部会委員、大学設置・学校法人審議会大学設置分科会委員等を歴任。

*ウィリアム・アンド・マリー大学、ジョージタウン大学、ディキンソン大学

取材・文/児山雄介 撮影/伊藤靖史